情 報 学 基 礎 45－7
（1997. 5. 15）

電子的な情報資源が文学研究に与える可能性
ドイツ文学研究者の情報利用行動をもとに

越塚美加

学術情報センター研究開発部

本稿では、人文・社会科学分野の研究者の電子的な情報資源の利用が増加しつつある現状を踏まえ、それらの資源が文学研究に与える可能性を、ドイツ文学研究者の情報利用行動に基づいて考察する。先行研究等の情報を収集する上では、図書の装丁等視覚的な情報も利用したブラウジングが重要な位置を占めており、書誌情報のみのデータベースについての評価は低い一方で、引用索引型のデータベースに対する評価が高かった。また、様々な機関や人によって構築されている全文データベースや電子化されたテキストは、研究の素材として共有することによって新しい研究の可能性を生みだす。

POSSIBILITIES OF ELECTRONIC RESOURCES FOR LITERARY STUDIES

Based on the information seeking behavior of scholars in German literature

Mika KOSHIZUKA

National Center for Science Information Systems (NACSIS)

3-29-1 Otsuka, Bunkyo-ku, Tokyo 112, Japan

The purpose of this paper is to consider how the electronic resources can change the studies of literature based on the information seeking behavior of scholars in German literature. They set high value on Arts & Humanities Index database that is a citation index database although they did low value on bibliographic databases. Because it is necessary for them to browse those materials directly, and the visual information like binding of books is one of the criterion to tell if they are useful for their studies or not. Full text databases and/or electronic texts provide new opportunities for the scholars as research materials.

1　文学研究をとりまく環境の変化

図書館は、人文科学分野の研究者にとって重要な情報源であるとされている[1]。現在、日本でも 30 を越える大学図書館で、図書館資料にアクセスするための手段の一つである蔵書目録がオンライン目録（OPAC: Online Public Access Catalog）に変わりつつある。OPAC を導入した図書館では、従来のカード目録は凍結され、以降受け入れられる資料の目録は OPAC のみで提供されることが多い。そのため、目録から蔵書にアクセスしようとする研究者は、コンピュータ端末を通じて電子的な情報資源を利用せざるを得ない状況が生じている。また、これらの OPAC は多機能化し、さまざまなデータベースや電子メール等、学内の他の電子的な情報資源へのアクセスも可能になっており、Online Public Access Systems と呼んだほうがよいような状況が生まれつつある[2]。学内 LAN の整備に伴い、こうした電子的情報資源は研究室から利用できるようになってきた。

Wiberley & Jones は、その後の 5 年間で、情報技術の急速な進展を認識していても電子的な情報資源をまったく利用する気にならない人もいる一方で、人文科学分野の研究者の間にもかなり情報技術の導入が進んでいることを指摘した[3]。また、Shaw & Davis は、1994 年に Modern Language Association の会員 1,000 人に対し、郵送及び電子メールで質問紙を送付して、コンピュータの利用状況を明らかにする調査を行なった[4]。その結果、家庭でコンピュータを利用している人は 92%（オフィスでは、66%）、電子メールを利用していない人は 14%のみであること、毎週 OPAC を利用している人は 69%いることが明らかにされた。また、CD-ROM 版あるいはオンライン版の MLA International Bibliography を毎週利用している人が 12%、毎月利用している人が 42%など、予想外に多くの人が利用していることがわかった。

そこで本稿では、日本の大学に所属するドイツ文学分野の研究者が、研究に必要な資料をどのように入手しているかを明らかにした調査の結果を報告し、その結果に基づいて文学研究に電子的な情報源がもたらす可能性について論じる。

2　日本のドイツ文学研究者の情報利用行動

2.1　調査の目的

外国文学の研究においては、研究に必要なさまざまな資料が日本国内から物理的に遠い場所にあることが多い。本稿で検討の対象としたドイツ文学の場合であれば、ドイツ文学関係の二次資料や一次資料は日本国内にもあるが、ドイツ国内で所蔵されている文献量の比ではなく、またドイツ文学で修士号や博士号を取得した研究者が図書館員を務めて、他の研究者のために高度なサービスを提供しているような図書館もほとんどない状況にある。

しかし、インターネットに代表されるネットワークが比較的容易に利用可能になり、また適切なデータベースや情報サービスがそれらのネットワークを介して提供されることになれば、「学際的」で「物理的に遠い場所」に研究に必要な大量の資料があるドイツ文学研究者にとってのメリットは大きいだろう。

そこで、本調査では、日本の大学に勤務するドイツ文学研究者が実際にどのように情報を入手しているかを明らかにし、ドイツ文学研究における電子的な情報資源の有効性について考察する。

2.2 調査対象の選定及び調査期間

調査は、日本国内でもドイツ文学研究に関する資料を多く持つ機関は比較的東京圏に集中している現状を踏まえ、国内での資料入手についても比較的困難を伴うと想定される九州の国立大学に所属する3人の研究者を対象として行なった。被調査者の選定理由としては、九州地区の研究者の方が、東京圏に勤務する研究者以上にネットワークサービスから利益を享受する可能性が高いと推測できることによる。調査期間は、1995年3月である。

なお、1994年3月～4月にかけて、東京圏の私立大学に所属するドイツ文学研究者2名に対して行なった調査の結果を比較の対象として示すこととする。

2.3 調査方法

調査方法は、「拡張した具体例叙述法」を用いた。これは、研究を進める上で既存の文献が重要な役割を果たす研究に携わる研究者の情報利用行動を明らかにするために、越塚が開発した手法である[5]。簡単に言えば、被調査者が調査時点までに発表した一連の論文を用い、その中で引用されている文献をいつ、どのように知り、どこから入手したかをインタビューによって明らかにすることで、研究過程における情報探索行動を考察しようとする方法である。

なお、インタビューの所要時間は1時間から1時間30分程度であり、各被調査者の研究室で行なった。インタビュー内容は、被調査者の承諾を得てテープに録音し、それを起こしたものと、インタビュー中に作成したメモをもとに分析を行なった。

2.4 調査結果

調査結果の概要を表1に示す。表中の被調査者a、b、cが今回の被調査者であり、d及びeは、1993年に行なった調査の被調査者である（表2）。

3 電子的な情報源が文学研究に与える可能性

3.1 オンライン / CD-ROM版の書誌データベース及び引用索引データベース

今回の調査及び1993年の調査の両方で、被調査者が発表した一連の文献中で重要だと思われる文献を引用している文献や、重要だと思われるキーワードをディスクリプタとしてもっている文献を、予めDIALOG社（当時、現Knight Ridder社）で提供しているARTS & HUMANITIES SEARCHで検索し、その結果をインタビューの最後に提示して、研究上役に立つかどうかを評価してもらった。このデータベースのレコードは、書誌事項、索引語、引用文献リストから成っており、特定の文献を引用している文献の検索が可能である点で、多くの書誌データベースとは異なっている。

口頭でオンラインデータベースやCD-ROM版のデータベースについて有用性を尋ねた際には、ほとんどの被調査者が「書誌事項の確認はできても、実際のテキストを見ることができないので、役に立たない」と回答した。しかし、実際の検索結果を示し、キーワードからだけではなく、特定の被引用文献を持つ検索ができること等、データベースの特徴および各データの説明をしたところ、被調査者aを除くほぼ全員が関心を示した。被調査者aは、自分の研究対象であるGrassに代表される現代ドイツ文学者は、その年

表1　被調査者の研究および資料探索の特徴

<table>
<tr><td></td><td colspan="2">被調査者 a</td><td>被調査者 b</td><td>被調査者 c</td></tr>
<tr><td>研究テーマ</td><td>Gunter Grass</td><td>映像と現代文学</td><td>Hoffman の特定の作品論</td><td>スイスの社会（現代文学）</td></tr>
<tr><td>所属</td><td colspan="2">九州　国立大学</td><td>九州　国立大学</td><td>九州　国立大学</td></tr>
<tr><td>既存研究の量</td><td>現代文学としては扱われることが多い</td><td>多い</td><td>少ない</td><td>文学分野：少ない</td></tr>
<tr><td>資料</td><td>入手しやすい</td><td>入手しやすい</td><td>被調査者がとっている観点からの研究はほとんどない。
当該テーマに関する心理学分野（＝被調査者がとっているアプローチ）の論文は多い</td><td>現代スイスの政治や社会に関する事柄を日本で収集するのは難しい</td></tr>
<tr><td>資料探索
遡及</td><td colspan="3">適切な論文や単行書の引用文献を芋づる式に探索</td><td rowspan="2"></td></tr>
<tr><td></td><td></td><td>神田に映像関係の図書専門の書店があり、そこでブラウジングして関連のありそうな面白い図書を入手</td><td></td></tr>
<tr><td>カレント</td><td>特に重要というわけではない</td><td></td><td></td><td>カレントな資料が中心

現在は、在日スイス大使館から読み終わった新聞を譲り受けている</td></tr>
<tr><td>その他</td><td colspan="3">図書館で探しても見つからないが、どうしても入手したい文献は、ドイツの知人に直接依頼して入手する
前年に発表された全研究論文を網羅的に収録している書誌があり、掲載論文の複写も請求できるが、ほとんど利用しない</td><td>文学分野以外の領域については、専門の研究者（同僚）に尋ねたり、同一人物から紹介を受けて、重要文献を入手</td><td>政治や社会等、文学分野以外の販売書誌を書店から入手し、
単行書をチェック
最近このテーマに着手し始めた</td></tr>
</table>

に発表された作家論や作品論等の研究文献が翌年には網羅的な二次資料として出版されるため、書誌データベースの検索は必要ないとした。

この結果から、電子的な情報資源が必ずしも受け入れられない、あるいは、評価されないわけではなく、適切なデータベースであれば受け入れられる素地があることが分かる。特に、 ARTS & HUMANITIES SEARCH は、芋づる式の探索方法に容易に組み込むことができる。

Bates は、人文科学分野の研究者のデータベースの検索について調査した一連の Getty Project の概要をまとめた論文で、DIALOG が提供するデータベースの検索をほとんど受け入れられなかった研究者がいた一方で、OneSearch のように一度に複数のファイルできる仕組みについては、学際的な研究に適していると積極的に評価した研究者もいたことを示した[6]。複数のファイルを一度に検索できるのは、オンラインデータベースの利点である。図書館員等が研究者に周知を図り、個々の利用者にとってのメリットを示すことができれば、実際の利用に結び付けることが可能であろう。

表2　1993年に実施した調査の被調査者の研究および資料探索の特徴

<table>
<tr><td></td><td colspan="2">被調査者 d</td><td colspan="2">被調査者 e</td></tr>
<tr><td>研究テーマ</td><td>一角獣</td><td>Nadler
（作品・作家論）</td><td>Moritz
（作品・作家論）</td><td>ﾌﾘｰﾒｰｿﾝと啓明主義が
文学に与えた影響</td></tr>
<tr><td>所属</td><td colspan="2">東京圏　私立大学</td><td colspan="2">東京圏　私立大学</td></tr>
<tr><td>既存研究の量</td><td>文学：多い
美学：多い</td><td>文学分野の研究者は
少ない（7人）</td><td>昔から細々と
近年再注目</td><td>他分野：多い
文学分野：2人</td></tr>
<tr><td>資料</td><td>入手しやすい</td><td>書かれたもの自体少ない</td><td>原資料：未確定
近年公開開始
研究論文：ある著作について偏りがち</td><td>原資料：内部資料
大部分非公開
研究論文：元会員のものは比較的信用できるがそうでないものは注意</td></tr>
<tr><td>資料探索
遡及</td><td colspan="3">テーマに対する漠然とした意識を元に、まとまった成果を収めた単行書や解題書誌から遡及探索を行う
→引用されている文のもとの文脈を確認するため
→重要な研究者、重要な文献の同定</td></tr>
<tr><td></td><td colspan="2"></td><td colspan="2">原資料の発掘
文献リスト等も作成されないまま放置されていたものが、ドイツの統一によって公開されつつあり、原資料の発掘そのものも研究となる

古い研究の内容を再確認</td></tr>
<tr><td>カレント</td><td colspan="2">特に重要というわけではない</td><td colspan="2">原資料の公開が旧東独で最近始まったので、これから2-3年の間に発表される論文が多いはず
→定期的に索引誌や抄録誌をチェック</td></tr>
<tr><td>その他</td><td>フランス文学や国文学の資料を使うときには、専門の研究者（同僚）に、利用すべき参考図書やその使い方についての指導を仰ぐ</td><td>博士論文として準備を進めている
→指導教官あり
→通常とは異なる探索法（二次資料を使って網羅的な検索を行った）</td><td></td><td></td></tr>
</table>

3.2 全文データベースや電子化されたテキスト

今回の調査の中で、「ある作品中で重要な役割をはたしている原語で△△いう菓子は、直訳すれば□□であるにも拘わらず、日本語ではまったく異なる○○という語で訳され、広く認知されている。では、最初に○○と訳したのは、いつのことで、また誰がそのように訳したのか、データベースで分からないか」という質問を受けた（まだ遂行されていない研究のアイディアが明示されてしまうため、問題となっている菓子の名称は伏せておく）。残念ながら、書誌データベースでは当該作品のリストを作成することはできるが、先の質問に直接答えることはできない。しかし、同じ作品の異なる版の比較研究が伝統的に一つの形態としてあること、研究を遂行する上で資料のテキストそのものの確認が重要な位置を占めること等を考えあわせると、文学分野の全文データベースや電子化されたテキストの充実及びそれらを利用するためのよりよいインタフェースの開発は、文学研究の一部に大きな影響を与え得る。

欧米では、Text Encoding Initiatives(TEI) 等によってすでに文学作品や辞書等の電子化が進められている。TEI は、「学術的な研究を目的とした電子的なテキストの作成及び交換のためのガイドラインを作成し、言語を扱う様々な利用者のより広範な利用を満足させるための国際的なプロジェクト」である[7]。多

くの団体や個人が、TEI Guidlines で定められた一定の規則にしたがって SGML のタグを付与した構造化されたテキストを作成しており、作成されたテキストは広く文学研究に供されている。

一方で、1993 年に行った調査の被調査者 d は、「研究に役立つよい本は、（図書館目録や販売目録ではなく）古本屋の書棚で見つけることが多いが、どうやって見つけるかといえば、実際にその本を目で見て装丁がよいかどうかで判断する等、今までに培われた勘によることが多い」と述べているように、ブラウジング行動が研究を遂行する上で重要な役割を果たしている[8]。現在電子化されている情報資源では、こうした装丁等の視覚的な手がかりは、検索に用いることが難しく、また、一度ブラウジングした文献を整理する際の手がかりとすることも難しい。この点は、今後研究を進めるべき一つの方向と言えよう。

電子化された情報資源は、先行研究を検索するために用いるというよりは、研究の素材としての価値が高いと思われる。例えば、米国ニュージャージー州立ラトガース大学の Center for Electronic Texts in the Humanities (CETH)では、明治初期にお雇い外国人として英語を教えており、日本の文化を米国に紹介した William Elliot Griffis が収集した資料のうち、Griffis と妹の Margaret Clark Griffis の教え子が書いた英文エッセイを、先の TEI のガイドラインにしたがって電子化し、スキャンイメージとテキストの両方で提供している[9]。テキストは、「生徒のエッセイ」、「グリフィスのコメント等の書き込み」、「オリジナルでは損傷しているため推測によって補った部分」を区別してデータ化しており、端末上で見れば、エッセイ部分は黒い文字、コメントは青い文字、損傷部分を補ったものは灰色の文字と、識別可能になっている。

このように、電子的なテキストは、柔軟かつ多元的に作成することができる。一つのテキストに対する複数の注釈を各々を区別しながら加えていくこともでき、電子化されたテキストを共有することで新しい研究の形態を実現する可能性が生まれたと言える。

引用文献

[1] 新倉利江子. 大学図書館における人文科学分野の研究者を対象とした情報サービスの可能性. Library and Information Science, No.28, p.61-80(1990)

[2] Beaulieu, Micheline; Borgman, Christine L. A new era for OPAC research: introduction to special topic issue on current research in Online Public Access Systems. Journal of the American Society for Information Science, Vol.47, No.7, p.491-492(1996)

[3] Wiberley, Stephen E. Jr.; Jones, William G. Humanists Revisited: a longitudinal look at the adoption of information technology. College & Research Libraries, Vol. 55, p.499-509(1994)

[4] Shaw, Debora; Davis, Charles H. The Modern Language Association: electronic and paper surveys of computer-based tool use. Journal of the American Society for Information Science, Vol.47, No.12, p.932-940(1996)

[5] 越塚美加. 情報利用行動調査の一技法としての具体例叙述法. 図書館学会年報, Vol.39, No.1, p.1-12(1993)

[6] Bates, Marcia J. The Getty end-user online searching project in the humanities: Report No.6: Overview and conclusions. College & Research Libraries, Vol.57, p.514-523(1996)

[7] URL: http://www.uic.edu/orgs/tei/index.html（1997 年 4 月 18 日現在）

[8] 越塚美加. 文献のブラウジングが研究過程に与える影響. 学術情報センター紀要, Vol.8, p.131-142(1996)

[9] URL: http://www.ceth.rutgers.edu/projects/griffis/project.htm （1997 年 4 月 22 日現在）